

海部病院分娩再開

牟岐町の県立海部病院が、産科医不足で休止していた分娩を10月から再開することになった。

徳島大学病院の産婦人科医3人が交代で担当し、当面は出産時リスクの低い2人以下の通常分娩が対象となる。まだ完全な形とは言い難いが、約3年ぶりの再開をひとまず歓迎

に県が運営費を負担して徳島大に設した産婦人科、外科など四つの「寄付講座」が貢献した。

4講座のうち「地域産婦人科診療部」の産婦人科医3人が4月から海部病院に派遣され、交代で勤務することで24時間体制の診療が可能になった。

さらに分娩に携わる助産師や看護師も昨年から分娩を休止している。近くの病院で、お産ができなければ、出産を望む女性にとっては不安が募つた。

体制の充実が課題だ



師の実習や医療機材の点検・整備などを経て、ようやく分娩再開の運びとなつた。

現在、県内で出産できる施設は5つとなつた。

海部郡で唯一分娩を扱っていた同病院では、産婦人科医が2006年7月に退職して以降、徳島大病院の医師派遣で分娩体制を維持していたが、産科医不足で派遣できなくなつたため、翌年9月に休止に追い込まれた。

再開に向けては、医師確保を目的としていた。しかし、産婦人科医3人が交代で勤務する体制は、これまでのものと比べると、かなり厳しい状況にある。

海部病院では現在、同郡3町や知農東洋町の妊婦15人が検診を受けしており、そのうち11月下旬予定の1人が同病院での出産を希望しているという。

今後は分娩体制を軌道に乗せていくのが目標だ。医師確保を目的とした同病院では、医師の確保や体制整備を進めることで、24時間体制の診療が可能になつた。

海部病院では現在、同郡3町や知農東洋町の妊婦15人が検診を受けおり、そのうち11月下旬予定の1人が同病院での出産を希望しているという。今後は分娩体制を軌道に乗せていくのが目標だ。医師確保を目的とした同病院では、医師の確保や体制整備を進めることで、24時間体制の診療が可能になつた。

このほか、初産などに年」と位置づけ、医師の養成・確保も対応できるよう体制の充実を図つた。一方で、医師や診療科の偏在は正しくない。JR徳島厚生連・麻植協同病院でも、よりいっそ力を入れていく必要がある。

全国の産婦人科医の総数は、わずかに増加したが、それによって過重労働が改善されたわけではない。

深刻な医師不足を受け、国は全国の大

学医学部・医科大学の定員を増やしていく。さらには、1980年以降認めてこな

う医療訴訟も増え、心身ともに過酷な状況にある。

1990年代から減少し続けていた

医師や診療科の偏在は正しくない。

國も自治体も、地域でのお

産を守る体制づくりに全効率で取り組んでほしい。